

● Study ●

「自ら考えること」の大切さは、誰もが知っています。では、そのために「どんなことが大切か」について、課長は亀井君に何を言いたかったのでしょうか。次の2つに分けて考えてください。

(1) ケースに示した下線部 ① についてはどうでしょうか。

.....

.....

.....

(2) ケースに示した下線部 ② ③ についてはどうでしょうか。

.....

.....

.....

課長は亀井君に「自ら考えること」を体験させようとしています。もっとも亀井君の反応は十分とはいえません。課長が亀井君に言いたかったことを、次の3つに分けて考えてみましょう。

1 事実・現実に向ける

たとえば、不況だ、危機だと言われて、確かにそうかもしれないと思うものの、身の毛がよだつような恐怖心や不安感を持つことは、むしろ少ないはず。私たちは、飢えや民族紛争などで絶えず死の危機と隣り合わせに生きている人たちに比べて、たいへん楽な生き方をしているのかもしれませんが、“〇〇の危機”などということがありますが、本当にそのことを“わかって”使っているかは別問題であることも少なくありません。

“本当にわかる”というのは、言葉の奥に隠されていることを白日のもとに引きずり出す、といった感じではないでしょうか。

言葉は大変便利なものです。いろいろな内容を伴う事実を集めて、ひとつの概念にまとめることができます。たとえば、仕事で失敗した状態やお



金を落とした状態、これらを“悲しい”と表現できるのです。しかし、便利な半面、落とし穴もあります。悲しいと表現したとたん、その内容が抽象化されて、相手にその生々しさが伝わりにくくなるのです。

課長は、亀井君に「そんな簡単にわかったような気持ちになるなよ」と言っています。何を言いたかったのでしょうか。“厳しい環境”とか“現状の延長線上では成長を確保できない”というのは、まったくその通りなのでしょう。しかし、言葉として理解するだけでわかったと思うのではなく、“現状の延長線上とは具体的にどんなことをいうのか”“なぜ、それはダメなのか”など、根本にある事実や現実に向き、と言いたかったのではないのでしょうか。だから大事なことは“どのように厳しいのか”を肌で感じることで、できれば実際に見ることだよ、と言っているのです。

問題解決では「まず、事実をしっかりと知る」といいます。それと同じです。問題や疑問点を言葉として表面的に理解するだけでなく、それらに関わる事実や現実に向き合うことが考えるための根本なのです。